

令和5年度 web市民公開講座

Social Networking Service

SNSと
子どもの
健康財団HPにて
公開中！

特別寄稿

「お子様と、視線を合わせて、寄り添って」

東京女子医科大学名誉教授
学校法人立教女学院理事長

大澤 真木子

公益財団法人小児医学研究振興財団では令和5年度の広報啓発事業として「Social Networking Service (SNS)の功罪-子どもの健やかな成長:発達のために-」をテーマに市民公開講座を企画致しました。コロナ禍で、「子ども達の学びを止めないために」やむなくWeb授業も行われ、保護者の方のお仕事もWeb会議が取り入れられるなど、デジタル化の波が加速しました。教育現場で、プログラミングの授業が小学校で2020年度から、中学校で2021年度から、高校では2022年度から開始され、一人一台の学習用端末が児童・生徒達に配布され、また、大学入試共通テストに「情報」が2025年度から加わることになりました。これからの時代、SNSとの関係は、ますます強くなって行きます。

一方、愛着形成が必要な時期に、授乳しながらスマホを閲覧になり、お子様と視線を合わせておられない保護者の方もお見かけします。こどもに目を向けると、デジタル社会にあって、SNS依存、ゲーム依存により、不登校に陥っている小児もいます。こどもの学びは、「まねる」事から始まりますので、保護者の方が、SNSに興じる姿を幼少期のおこさんに余り見せないことが大切です。睡眠不足や、脳の発達障害を起し難くするためにも、ゲームに興じる時間を区切ることが、重要です。

そのためにも、我慢することが難しい成長期のこども達には、あらかじめ、SNSの興味を持つ前に、十分な愛着形成、運動や外遊びの楽しさを実感してもらい、家族と一緒に食事をするたのしさなどを先に、感じる事が大切です。

周囲の保護者の方が、インターネット空間が子どもたちに与える恩恵や弊害について、十分理解し、おこさんが18歳になる迄に、デジタルリテラシーを獲得できるように、おこさんと共に、方策を立てて成長に導いて頂けたら幸いです。!!

SNSと子どもの健康

公開期間：令和5年9月頃～令和6年3月末まで

●主催：(公財)小児医学研究振興財団

- 後援：厚生労働省、(公社)日本小児科学会、日本製薬団体連合会、(公社)日本医師会、(公社)日本小児科医会、(公社)日本小児保健協会、(公社)こども環境学会、(公社)日本新生児育成医学会、(一社)小児精神神経学会、(一社)日本外来小児科学会、(一社)日本学校保健学会、(一社)日本子ども虐待防止学会、(一社)日本小児アレルギー学会、(一社)日本小児感染症学会、(一社)日本小児救急医学会、(一社)日本小児神経学会、(一社)日本小児心身医学会、(一社)日本保育保健協議会、(公財)日本学校保健会、(公財)母子衛生研究会、(社福)日本保育協会 ●協賛：日本マクドナルド(株)、(株)オグラ ●特別寄付者：松井 陽



「SNSと子どもの健康」を考えよう

社会福祉法人子どもの虐待防止センター理事 座長 奥山 真紀子

デジタル技術の急速な進歩により、約30年前にスタートしたFacebook やTwitter(現X)といったSNS(Social Networking Service)は瞬間に社会に広がり、それまでのマスメディアに変わりSNSが情報収集の主役になりつつあります。それに画像が主体のYoutubeやInstagramが加わり、ゲームもネット上で行われるようになり、そこでの人間関係が重要になっているのです。

「インスタ映え」を気にして生活し、「推しのYoutuber」に親密感を感じたり、ゲームを含むネットで出会った友達「ネット友」が人間関係の中心になってきています。例えば、女の子との話で、「彼氏いるの?」という問いに、「いるよ」という返事が返ってきても、「ネット?リアル?」と聞かないと実態がわからないのです。ネットの中だけで完結する

関係性でも「愛している彼氏」と認識している子どももいます。このように、社会の人間関係というネットワークの作り方自体が大きく変化していますし、人間として外界どう見るかという認知の仕方も変わってきているのです。

一方で、子ども達にとっての危険も存在します。子ども達がそれに没頭して睡眠を削ったり、ネットいじめが横行したり、デジタルタトゥーと呼ばれるように、一度ネットに上がってしまうと完全な削除は不可能という問題もあります。自分の性的な映像を送ってしまって、ばらまかれる不安に怯える子どもも少なくありません。また、SNSの場合、その人の関心に合う情報だけが選択されて届けられているという事実も知らないで、それで全体を見ているように誤解し、独特の考えにはまってしまいう危険もあります。

このような危険から子どもを守るためには、大人たちがSNSとその子どもへの影響をできるだけ正確に理解する必要があります。今回の市民公開講座では、我々の日常に欠かせなくなってきた便利なSNSを理解し、子どもへの影響、特に子どもにとっての危険を知り、それにどう向き合うか、どのようにデジタルリテラシーを高めるかなどについて考えていきたいという趣旨で、4人の方々にお話しいただきます。演者のお話を聴きながら、皆様も一緒に考えてみてください。



子どもとSNSとの関わり方

国立成育医療研究センター 広報企画室 村上 幸司

1990年代後半から徐々に利用率が増え始め、2000年に入って飛躍的に普及したインターネット。私たちが日々利用しているSNSも、この頃に誕生しました。それから20年ほどで、多くの方々を利用するようになり、Facebookの世界ユーザー数はいまでは約29億人。これは、世界人口の約36%にもなります。自治体もアカウントを開設して災害情報などをいち早く市民に伝えることで、命を守ることにもつながっています。SNSはその即時性と拡散力から、もはや私たちの生活には欠かせない重要な「インフラ」となっています。

今の子どもたちを見ると、文部科学省が進める「GIGAスクール構想」で、インターネットやSNSに学校生活・私生活を問わず深く関わっています。インターネットの利用率では、小学4年生～高校生でほぼ100%です。デジタルネイティブ

と言われる、今の子どもたちにとって、インターネットやSNSは当たり前にあるものですが、その性質についてはしっかり理解できていないのではないかと考えています。特に注意しなければいけないことは、「パーソナライズ」です。SNSは、ユーザー検索履歴、いいねした投稿内容など、さまざまな要素から、ユーザーにとって興味のある情報だけを選んで表示する性質があります。そうすると、自分が投稿した内容について自分と似た意見ばかりが返ってくる状況になったり、見たい情報が優先的に表示され、ユーザーの観点に合わない情報から隔離されたりするような状況になります。

子どもがSNSを利用するにあたっては、使い方だけではなく、自分が望むと望まざるとにかかわらずパーソナライズされているということをしっかりと認識することが求められます。そして、保護者が子どもの意見を聞きながら、SNSのメリット・デメリットをしっかりと説明し、子どもが納得して利用できる環境を、子どもと一緒に作っていくことが大切だと考えています。



CuSTOM の研究室前にて James 先生と



シンシナティ小児病院の玄関前にて

留学体験記

新潟大学消化器内科 富永 顕太郎

2020年7月から2022年12月までの期間、シンシナティ小児病院のJames Wells博士の研究室に留学する機会をいただき、2022年度には小児医学研究振興財団の海外留学フェローシップ助成のもと、消化管オルガノイド(三次元組織構造体)に関わる研究を継続することができました。

シンシナティは、アメリカ中西部のオハイオ州の主要都市の一つ

子どもたちの健やかな脳発達のために ~脳発達とデジタルメディアの影響~

東北大学スマート・エイジング学際重点研究センター センター長 東北大学加齢医学研究所 教授 瀧 靖之



ヒトの脳発達は、生まれてから非常に複雑な過程を経て成熟していくことが分かってきました。近年、世界的に脳MRIを用いた健常小児の脳発達を明らかにする研究が行われていますが、私達はその中でも300人の5~18歳の健常小児を対象に大規模な脳発達研究を遂行し、多くの知見を明らかにしてきました。例えば、脳の発達は場所によって発達のピークの時期が異なる事が明らかになってきました。例えば、後頭葉など脳の後ろ側は早いタイミングで、色々な人間らしい高次認知機能を担う領域は思春期近くになって発達のピークを迎えることが明らかになっています。また、睡眠や朝食などの種々の生活習慣も脳発達に影響を与えます。他方、デジタルメディアが脳発達にどのような影響を与えるか、またSNSによるコミュニケーションが脳発達にどう影響を与えるかは重要な関心事で、少しずつ

明らかになってきた面もあります。例えば、相手の気持ちを理解して適切な対応をする能力である共感性は、SNSの発達によって低下している可能性も示唆されています。他方で、対面のコミュニケーションをしっかりと行うことで、共感性を維持向上することが可能ともいわれています。小児の脳発達を明らかにすることは、脳発達の機序を明らかにするだけでなく、小児の認知能力、非認知能力の向上においても大変重要と考えます。さらに、デジタルメディアが脳に与える影響を理解することで、どうデジタルメディアと共存するかのヒントにもなります。本講義では、これらの最新の脳科学の知見を分かりやすく紹介します。

SNSと成長

国立成育医療研究センター 社会医学研究部 石塚 一枝



日本の若年女性の間でやせの傾向が増加しているが、やせは、思春期早期から始まることも少なくない。思春期のやせは「不健康なダイエット」が主な原因となっている。日本の文化では欧米と同様、やせていることが理想の姿とされる。

思春期やせは、心理的、身体的、次世代への影響など中長期にわたり様々な影響を及ぼす。心理的な影響としては、理想の体型になれないことへの苦悩があり、抑うつ状態になることもしばしばある。また、家族との食事では、食事の量を意図的に制限することにより、家族がとまどい、親子関係が悪化することもある。一方、身体的な影響としては、栄養不足、低血圧、免疫力の低下などが挙げられる。思春期は骨量のピーク期であり、この時期のやせは将来の骨折リスクや骨粗鬆症の原因となる可能性がある。さらに、妊娠期のやせは出生時の体重低下やその後の生活習慣病リスクを増加させる。

思春期やせの特徴として、成長期にあるにも関わらず体重増加を避ける傾向や、食事や体重に過度に気を使う様子がみられる。思春期やせになるきっかけとして、テレビや雑誌などのメディアの影響が挙げられる。「やせていることがよい」というメッセージをメディアから受け取り、不適切に体重を減らす行為へと発展する。とくに、最近ではインターネットやSNSが思春期やせを増加させていることが懸念されている。特に極端なやせの写真などの情報に触れることで、やせなければいけないと感じる影響が懸念されている。

10代早期から、多くの子どもが学校以外でも、インターネットを使っている。さらに、小学生からSNSを使う子どもも増えている。そのため、インターネット情報の正確な理解や批判的思考能力の育成が重要となっている。子どもたちには情報の信頼性を判断する方法や事実と意見の違いを理解すること、情報の出どころを確認する能力などを育てることが求められる。

大人も子どもも“デジタル・シティズンシップ”を身につけよう!

~子どもの健やかな発達・成長と未来のために~

ネット教育アナリスト 尾花 紀子



阪神淡路大震災を経て携帯電話が、東日本大震災を経てSNS活用が一気に広がった日本。そして、コロナ禍で飛躍的に進んだデジタル化の波は、社会環境や生活環境だけではなく子どもたちの学習環境にも大きな変化をもたらしました。小学生からタブレット端末を使い、プログラミングの授業を受け、大学入学共通テストに新科目『情報I』の出題が決定(2025年度から)等々、大人には未経験のことばかりです。

デジタルが生活に不可欠なものとなり、世界中がネットワークでつながっている時代。日々生まれる新たなサービスや技術に「この使い方は?」「このトラブルの対処法は?」「この課題の解決策は?」とケースごとのマニュアルを求めている

は全く前に進めません。過去の経験、さまざまな情報、人との会話や議論などで得られたことから熟考・判断し、新たな事象に対応できる力が、年齢や立場を問わず必要とされています。こうした「デジタル技術の利用を通じて社会に積極的に関わり参加する能力や行動規範」のことを『デジタル・シティズンシップ』といいます。

近い将来、今ある仕事の約49%をAIやロボットが担えるようになるという予測があります。未来の大人を今育てている私たちにできることは、デジタルやネットが得意でも苦手でも、現状を直視し、正しく理解し正しく怖がり、上から目線ではなく子どもたちと同じ目線で前を見据え、寄り添いながら共に歩みを進めることに他なりません。

本講座では、世代感覚の違い、権利等の法律、人やネットや経済の特性、危機管理といったいくつかの切り口から、その手法を探っていきます。独自の情報モラル教育から国際標準のデジタル・シティズンシップ教育に舵を切った日本、まずは一緒に考えながらその第一歩を踏み出してみましょう!

公開講座の先生方の詳しいご略歴・所属学会等は
財団HPの市民公開講座に掲載されています。

<http://www.jfpedres.or.jp/2023.html>



であり、NBAのシンシナティレッズやNFLのベンガルズの本拠地であり、さらにテニスの ATP マスターズ 1000 の一つである Western & Southern Open も開催されることからスポーツも非常に盛んです。留学先であるシンシナティ小児病院は、ポリオワクチンが開発されたことで有名であり、全米小児病院ランキングでも毎年トップ3に入り、NIH研究予算獲得額でも全米屈指の小児医療・研究機関です。その中でも、オルガノイド・発生生物学研究においては世界をリードする研究機関であり、Center for Stem Cell & Organoid Medicine (CuSTOM)は、発生・再生研究分野の第一人者たちが集結し、オルガノイド研究に特化した世界初の研究機関として設立されました。そして、Wells博士は

CuSTOMのリーダーとして、iPSCを用いた消化管全般のオルガノイドの作製に世界に先駆けて成功し、多くの卓越した業績を上げております。私の研究では、免疫細胞(マクロファージ)を含む新規腸管オルガノイドを確立し、遺伝的素因を持つ小児IBD患者の病気の発生をモデル化し、遺伝子変異が疾患進行に与える影響を解明することを目指して研究を致しました。

この度、小児医学研究振興財団からのご支援もあり、取り組んで参りました研究をさらに発展させることができました。このような素晴らしい機会を与えてくださいました小児医学研究振興財団の皆様にご心より感謝申し上げます。そして、今後も日本の医学分野の発展に貢献できるよう努力して参ります。



研究助成金

- ① 小児医学領域全般に関する研究費助成 (Research Grants for Pediatrics) 総額 700万円 1件200万円以内
② 妊産婦・乳幼児・小児の栄養に関する研究(アサヒグループ食品研究助成金) 総額 100万円 2件程度
③ 小児の社会医学的研究(疫学・統計含む) (Research Grants for Social Pediatrics) 総額 300万円 1件100万円以内

研究を目的とした留学に対する助成

- ① 小児医学領域全般に関する海外留学奨学金 総額 350万円
② 子どもの心の問題に関する国内外への留学奨学金 総額 150万円

優秀論文アワード (機関誌に掲載された原著論文のうち、優秀論文の筆頭著者を褒賞)

小児医学研究振興財団アワード<和文誌><欧文誌> 日本小児科学会
福山・加我アワード 日本小児神経学会、日本小児精神神経学会 及び日本小児心身医学会

賛助会員(個人)

※敬称略 五十音順

- 相原 雄幸 赤坂 真俊 旭 壮一郎 芦田 明馨 安次 寛一 東 雄一 足立 裕一 熱田 衛一 鮎沢 義夫 新垣 浩一 荒川 正一 有賀 一誠 飯島 知子 家原 隆一 五十嵐 裕一 池田 アケミ 石井 尚吾 石井 正浩 石倉 健司 石崎 朝世 石崎 優子 位田 忍 井田 孔明 井田 幸博 市田 幸路 伊藤 悦朗 伊藤 未志 伊藤 進一 伊藤 辰夫 伊藤 保彦 伊藤 雄平 稲垣 治 稲垣 由子 井上 哲志 井原 健二 井原 幸人 今井 益孝 今泉 孝彦 今村 俊敏 岩田 力

賛助会員(法人)

- アサヒグループ食品株式会社
エーザイ株式会社
Story of the tortoise株式会社
第一三共株式会社
株式会社ナチュラルサイエンス
Meiji Seika ファルマ株式会社
医療社団法人 メディカル・プロ

協賛企業

- アサヒグループ食品株式会社
アステラス製薬株式会社
株式会社オグラ
JCRファーマ株式会社
大日本住友製薬株式会社
武田薬品工業株式会社
中外製薬株式会社
日本マクドナルド株式会社
ノボルディスクファーマ株式会社
ファイザー株式会社
マルホ株式会社

寄付者

- 加我 牧子/吉川 武志
松永 雅道

賛助会費は、所得税控除または
税額控除を受けられます。

個人 1口/年 10,000円 法人 1口/年100,000円

ご入会・会員のご所属先変更などのご連絡は、下記で承っております。



公益財団法人 小児医学研究振興財団
JAPAN FOUNDATION FOR PEDIATRIC RESEARCH
〒110-0015 東京都台東区東上野3-32-2 廣瀬ビル4B
TEL (03) 5818-2601/FAX (03) 5818-2602
e-mail:shouni-iken@jfpedres.or.jp
http://www.jfpedres.or.jp/

「子どもの世紀」について

News Letter題字の「子どもたちの世紀」は、日本小児科学会が創立
百周年を迎えた当時の厚生大臣であられた小泉純一郎先生に揮毫を
お願いしてご快諾頂き、総理大臣ご在任中にお書きいただいたものです。

編集後記

人の生活を豊かにするために作られた電子メール、チャット、ス
マートフォン、ChatGPTなどの文明の利器は、子どもの育ち、生
活や文化に影響を与えている。これらの利器による子どもの身体、
心理、社会性への影響を正確に捉え、どのように利用するのが子
どもの健やかな育ちに必要かを研究する活動が今こそ必要である。

(常務理事 五十嵐 隆)